



吉野川第一期改修百周年に向けて⑧

～藩政期最大の吉野川治水構想～

株式会社フジタ建設コンサルタント 高田 恵二



はじめに

吉野川に現在のような大きな堤防が存在していなかった江戸時代以前、吉野川は大きな蛇行に加え枝状に分流を繰り返し、自由な流れを形成していました。そのため、洪水時には川岸を崩し、ひどい時には流路を変えていました。江戸時代後期（1800年頃）に描かれた「村々沼川堰留之図」(図1)の第十堰(石井町第十)から上流の牛島村(吉野川市鴨島町牛島)境部分において、吉野川が大きく蛇行していた様子と複数枝状に流れていた様子が描かれています。この絵図は西覚円村^{せきながし}～第十村^{きふさぎ}付近の治水工事を行った頃の絵図と考えられています。「新川(掘り)」や「関流」、「堰留」、「逆堰」などの川の中の構造物に加え、周辺地域を防御するための「堤」^{つつみ}などの記載が確認でき、相当な費用と労力が費やされたことが想定できます。なお、この時の河川内の工事は徳島藩、堤については地域住民が費用を出し合って完成したとされています。



【図1】村々沼川堰留之図（国文学研究資料館蔵）に筆者加筆

古くから暴れ川として認知されていた吉野川では、出水のたびに周辺の田畑は「川成」^{かわなり}や「愈上」^{いへあがり}を繰り返して作物の収穫に影響を与えるとともに、修繕工事にも莫大な費用と労力を必要としていました。流域住民の生活だけでなく、年貢の収入や工事費など藩の財政をも大きく苦しめていました。

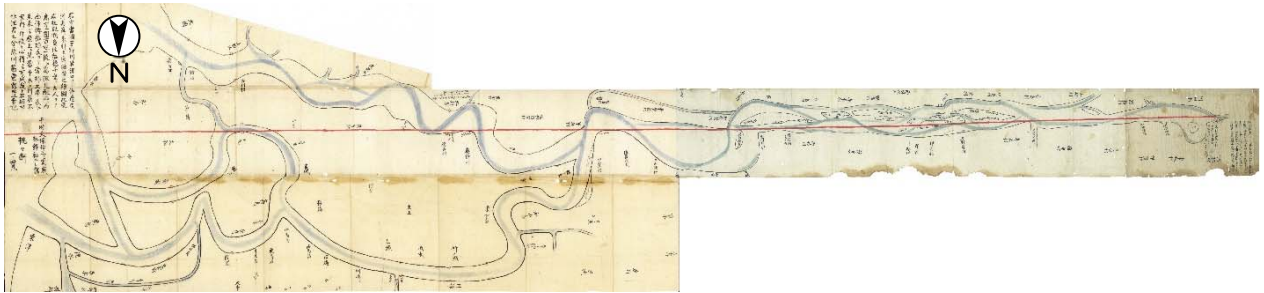
この状況を抜本的に改善するために、江戸時代後期に吉野川を直流化させるという大構想が提案されています。天保13年6月（1842）に作成された「芳野川堀替之絵図」^{よしのがわほりかえのえず}と天保12丑年早春（1841）に藩主に提出された「芳野川御普請愚考書（山田家文書）」^{よしのがわごらんしんぐこうしよ}の2つの史料により、この構想を確認することができます。

- ・芳野川堀替之絵図：徳島市春日神社蔵（出所・由来不明）
- ・芳野川御普請愚考書：徳島県立文書館蔵（山田家文書／板野郡住吉村与頭庄屋）

今回は、これらの史料をもとに「吉野川直流化構想」について概要を紹介したいと思います。

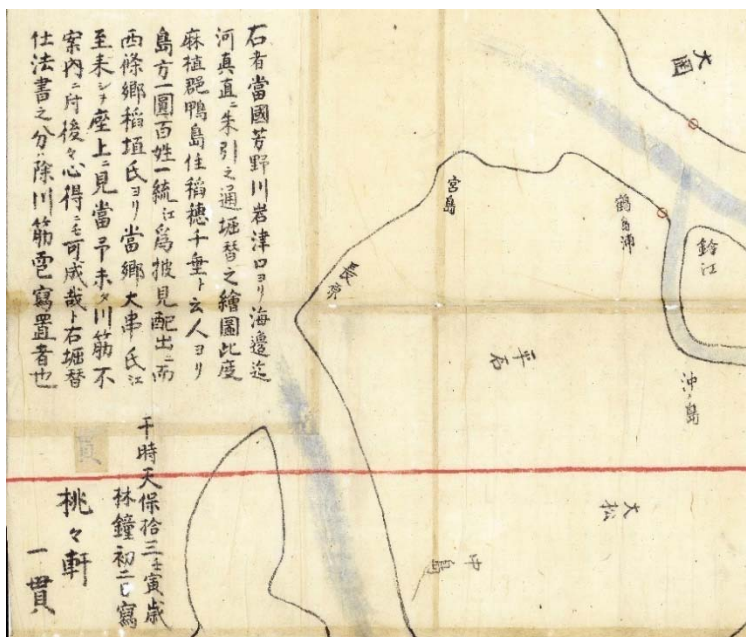
芳野川堀替之絵図

この絵図は由来不明ですが、天保13年（1841）に岩津（絵図右：現在の阿波市阿波町岩津）～吉野川（絵図左：現在の吉野川・旧吉野川・今切川）河口までが描かれた絵図で、ここに岩津から海辺まで真っ直ぐ朱引き（赤線）がなされています。（図2）



【図2】芳野川堀替之絵図（個人蔵）全図

この絵図の左肩部分にこの絵図作成の経緯があります。（図3）「当国（阿波国）吉野川、岩津口より海辺まで川を真っ直ぐに朱引きのとおり堀替えの絵図、このたび麻植郡鴨島に住する稲穂千垂（不詳）という人が吉野川全流域の人々に見てもらうために回覧し、西条郷稲垣氏から当郷大串氏（当郷は五条か？）に到来した際、桃々軒一貫（不詳）と称する人物が、“まだ川筋は詳しくわからないが、後々の心得のためになるようにと堀替仕法書の分は除き川筋だけ写し置くものである”」としてこの絵図を作成したと書かれています。本郷に到来したとあり、流域で実際に順次回覧され、共有されたことがわかります。また絵図と一緒に「堀替仕方書」も存在していたことがわかります。



右は当国芳野川岩津口より海辺迄
河真直ニ朱引の通り堀替の絵図、この度
麻植郡鴨島住稲穂千垂ト云う人ヨリ
島方一円百姓一統へ披見のため配出ニて
西条郷稲垣氏より当郷大串氏へ
到来して座上ニ見当、予未ダ川筋不案内ニ付
後々心得ニモ成るべくやト右堀替
仕法書の分ハ除川筋のみ写置ものなり
時に天保拾三壬寅歳 林鐘初二日写
桃々軒 一貫

※林鐘（陰暦六月の異称）

【図3】芳野川堀替之絵図（左上部分）

またこの絵図において、現在の善入寺島付近から下流において分合流と蛇行を繰り返す川が荒れた姿が描かれ、第十堰上流では分合流の川筋の中から第十堰を通過する朱引きとなっています。(図4)



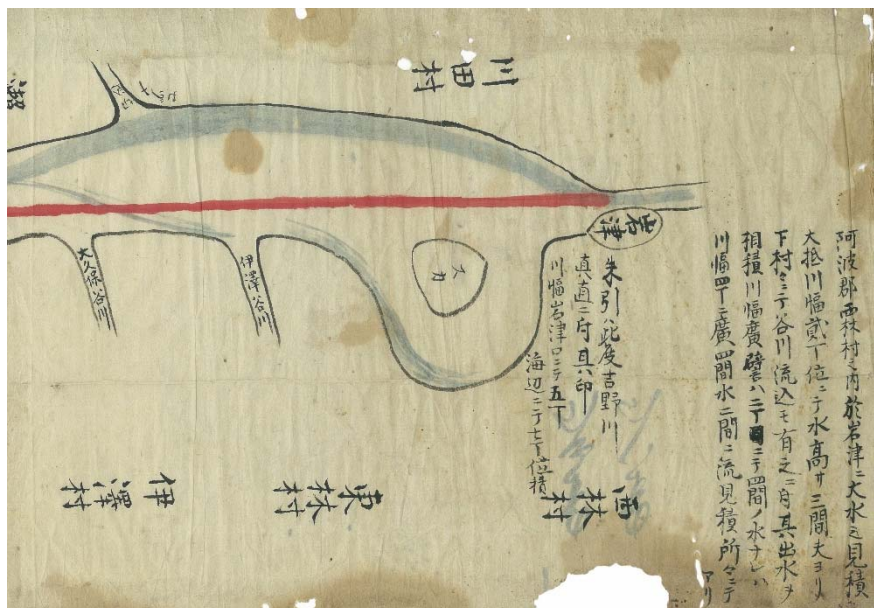
【図4】分合流と蛇行を繰り返す第十堰上流の様子

絵図左半分の第十堰下流側では、現在の吉野川、旧吉野川、今切川が描かれていますが、朱引きはほとんどが陸地を貫くように描かれており、第十堰直下では佐野須賀（徳島市国府町佐野塚）、徳命村（藍住町徳命）、貞方村（徳島市応神町東貞方・西貞方）付近を通過して今切川に合流し、再度陸地を通過して海辺に至っています。(図5)



【図5】芳野川堀替之絵図（第十堰下流部分の様子）

絵図の右端には、出水時の吉野川の流れをイメージした内容が記されています。(図6)



阿波郡西林村の内、岩津ニ於て大水の見積
大抵川幅二丁位ニテ水高サ三間、夫ヨリ
下村々ニテ谷川流込モこれ有二付、其出水ヲ
相積川幅広、譬ば二丁ニテ四間の水ナレバ
川幅四丁ニ広四間水二間ニ流れ見積所々ニテ
朱引ハ此度吉野川真直ニ付、其印
川幅岩津口ニテ五丁 海辺ニテ七丁位積

【図6】芳野川堀替之絵図（右端部分）

「阿波郡岩津において、出水の状況を見積もれば、おおよそ川幅2丁（218m）程度で水深3間（5.4m）、それより下流村々の支川の流入もあるため、その出水を見積もり川幅を広げる。たとえば2丁にて4間（7.2m）の水であれば、川幅を4丁（436m）に広げると4間の水が2間（3.6m）で流れる見積りとなる」とある。現在私たち河川技術者も「川の断面積×流速＝流量」の理論で河川計画を行っているので、治水の基礎を持ち合わせていたことがわかります。またここで根拠はわかりませんが「川幅岩津口にて5丁（545m）、海辺にて7丁（763m）」と見積もっていたようです。

「芳野川堀替之絵図」は、絵図左肩の絵図作成の経緯のとおり、川の姿と朱引きとここに必要な最低限の情報のみ記録されたものと考えられますが、直流化の川の位置がイメージできる大変貴重な史料であることは間違いありません。

芳野川御普請愚考書

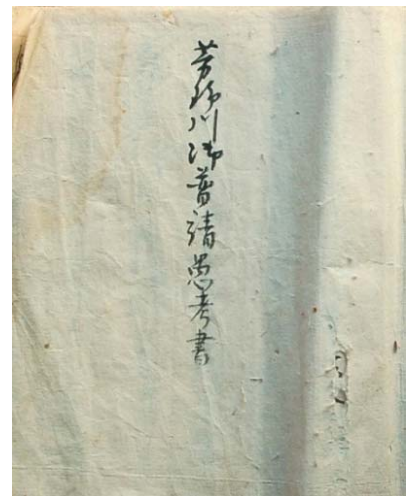
次に「芳野川御普請愚考書」を見ていきましょう。

これは、表紙（図7）を含め25頁にも綴られた吉野川直流化の提案書で、文中に「文政七申年十一月御上へ奉指上候、又亦天保十二丑年早春二御上へ奉指上候」と、文政7年（1824）に一度藩に提出し、天保11年（1840）に再度藩に提出した旨の記載があります。

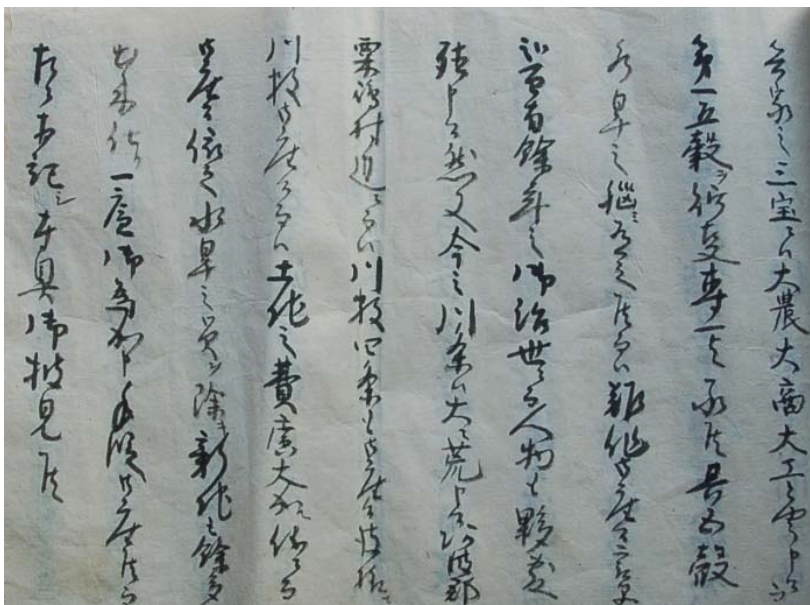
この史料の冒頭は次の様に記載されています。（図8）

「兵家の三宝は、農・商・工（職）と言われる。第一は穀物を貯えることが最も重要と心得る。その穀物栽培において洪水や干ばつの悩みがあることは耕作に苦難が絶えないものである。

もはや200有余年のご治世（徳川家・蜂須賀家の治世）にて、人口も甚だしく増加し、さらに今の川筋は大きく荒れ、阿波郡栗島村（現在の善入寺島の一部）付近では川の流れが4本にも分流している。そのように川の流れがあっては、土地の損失も膨大である。これにより洪水や干ばつの災害を除き、新しく耕作地もたくさんでき、全てを網羅する優れた手段がございまして、以降に書きつづり整理しましたのでご覧ください。」と吉野川の状態を前置きにして、良い手段があるので提案しますという内容で始まっています。



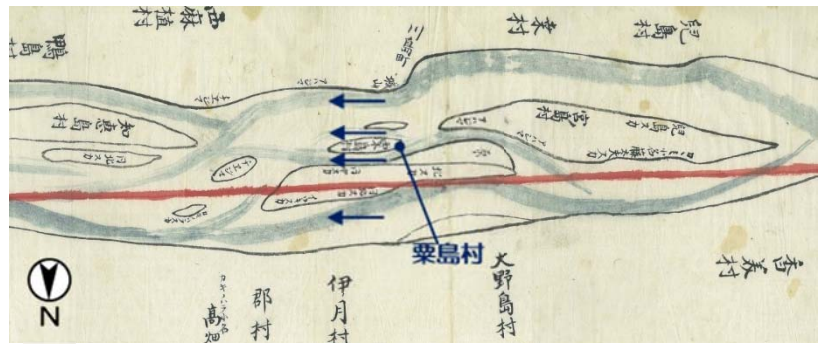
【図7】芳野川御普請愚考書表紙



兵家の三宝は農・商・大工とやら申候て
第一五穀ヲ貯事專一と承候、其五穀
水旱之悩ミ有之候てハ、難作御座候、最早
武百有餘年之御治世ニ而、人物も夥敷
殖申候、然又今之川ノ条ハ大荒申候、阿波郡
栗嶋村辺ニテハ、川數四条も御座候、彼様ニ
川數御座候てハ、土地之費広大成ル儀ニ而
御座候、依之水旱之災ヲ除キ、新地も餘多
出来仕リ、一廉御為成申手段御座候て、
左ニ相記シ奉具御披見候

【図8】芳野川御普請愚考書の冒頭部分（写真）と解説文

先述の「芳野川堀替之絵図」においても粟島村付近の川筋が4本となり、周辺の川の状況が大きく荒れていることがわかります。(図9)

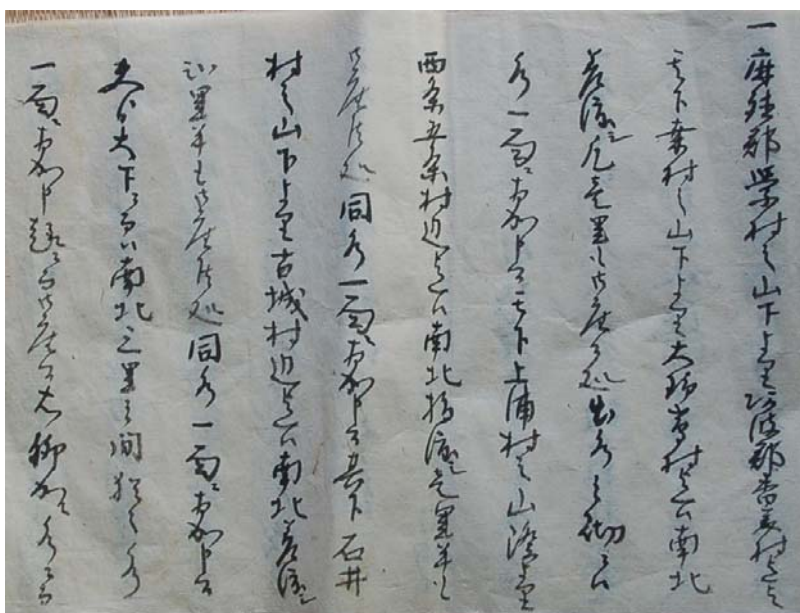


【図9】粟島村付近（芳野川堀替之絵図）

また、続きの文に「阿波郡西林^の内、於岩津に大水の見積仕り候処、大綱川幅式丁位二而水高サ三間にて御座候、是に上

より北へ漏し候水三分位と見積、此レヲ加へ候て水高サ四間に相成申候、右式丁之川幅ヲ四丁二廣ケ候へハ、水高サ式間二相成申候、又四丁之川幅ヲ八丁二仕候へハ、水高サ壹間二相成申候」とあり、この内容も「芳野川堀替見取図」と一致していることがわかります。

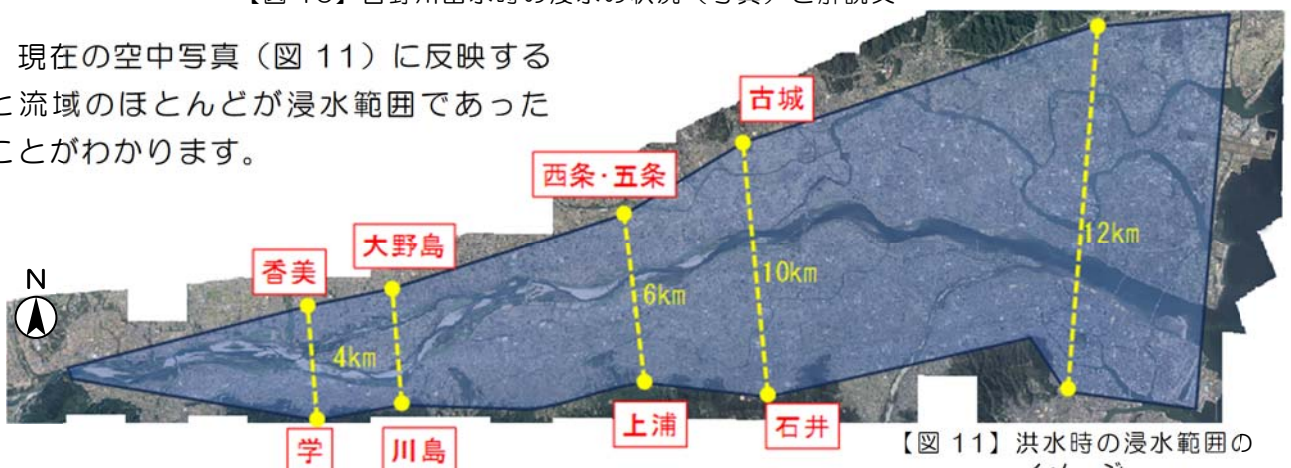
またこの古文書には、当時の吉野川の出水時の様子が確認できる次のような内容(図10)があります。「麻植郡学村(現在の吉野川市川島町学)の山裾から阿波郡香美村(阿波市市場町香美)と、その下流の桑村(川島町桑村)の山裾から大野島村(市場町大野島)の南北約4kmあるが、出水時には水一面になる。その下流上浦村(吉野川市鴨島町上浦)の山際から西条・五条村(阿波市吉野町西条・五条)の南北約6km、その下流石井村(石井町石井)の山際から古城村(板野町古城)の南北約10km、それよりずっと下流では南北約12kmもあるが同じように水一面となる」と、流域一帯が湖になることが記されています。



一 麻植郡学村之山下より阿波郡香美村迄とその下桑村之山下より大野島村迄ハ南北差渡シ凡壹里も御座候処、出水之砌三ハ水一面二相成申候、其下上浦村之山際より西条・五条村辺迄ハ南北指渡シ壹里半も御座候処、同水一面二相成申候、其下石井村之山下より古城村辺迄ハ南北差渡シ式里半も御座候処、同水一面二相成申候、夫より大下二而ハ南北三里之間、猶々水一面二相成申趣二而御座候、右聊成ル水二而

【図10】吉野川出水時の浸水の状況(写真)と解読文

現在の空中写真(図11)に反映すると流域のほとんどが浸水範囲であったことがわかります。



【図11】洪水時の浸水範囲のイメージ

このような浸水から生活を守るために、吉野川流域では竹林や石垣で高く嵩上げされた城構えの家がたくさんありました。(図12、図13)ここに記されているように吉野川が溢れ氾濫することに対し、自衛で生活を守るためにも相当な費用を必要としていました。



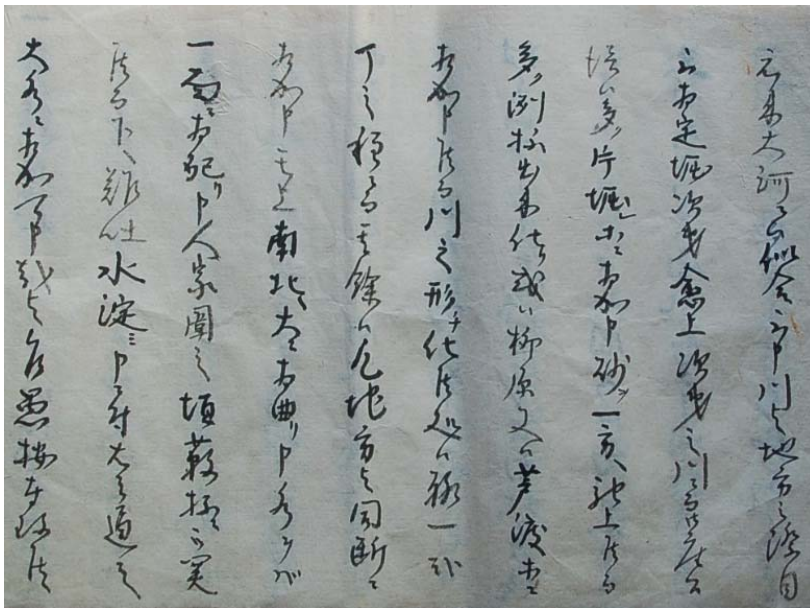
【図 12】洪水防御のための竹林



【図 13】石垣で嵩上げされた対策（石井町藍畑/田中家住宅）

また吉野川が氾濫し浸水する理由を次の様に述べています。(図14)

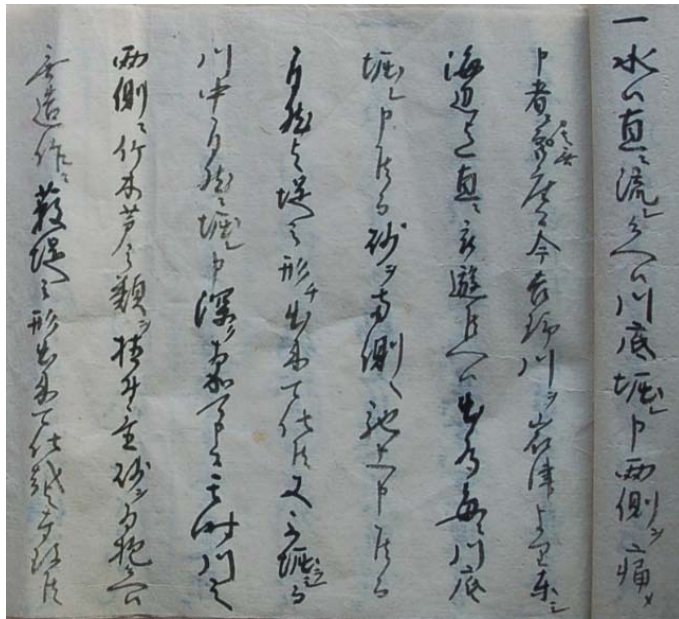
「根本的に、大河には相應しくない川と陸地の境目を定めても、掘れ放題・^{いえあが}愈上り放題の川のため、大きく片側が掘れ、片方へ土砂を巻き上げ、多く洲ができる、あるいは柳林または葦原などになってしまい、川の形状になっている部分はわずか1・2丁(100m~200m)ほどで、その他の部分はほとんど未開の荒れ地と同様になっています。そのうえ、南北に大きく曲がり、一面に溢れた水が民家の垣根や竹藪に閑留められ、下流に流れにくくなって水が滞留し、前段のように大水になってしまっている、と愚案ですがそのように考えます。」



【図 14】浸水理由（写真）と解読文

元来大河ニ似合不申川と地方之境目
被相定、掘次第愈上次第之川ニ而御座候
得、多ク片掘レ等ニ相成申砂ヲ一方へ馳上候而
多ク洲抔出来仕リ、或ハ柳原又ハ芦渡等ニ
相成申候而、川之形チ仕候処ハ聊一丈
丁之程ニ而其餘ハ凡地方と同断ニ
相成申、其上南北へ大ニ相曲リ申、水ヲバ
一面ニ相配リ申、人家圍之垣藪杯ニ被閑
候而、下へ難吐水淀ミ申ニ付右之通之
大水ニ相成可申哉と乍愚按奉存候

続く文章(図15)において、「水は真っ直ぐに流れれば川底が掘れ、両側を痛めることはなくなります。今、吉野川を岩津より東の海辺まで真っ直ぐにできれば、出水毎に川底が掘れ、両側に土砂を巻き上げ自然に堤防が形成されるでしょう。また人の力で掘らなくても川の中が自然に掘れて深くなるでしょう。その時、川の両側に竹木や葦の類いを植え付け置き土砂を抱え込ませれば、無造作に藪堤ができあがることになると考えます。」と、川を真っ直ぐに流すことができれば、川の流れの作用と竹木の植え付けなどで、無造作に堤防ができるとしてのメリットを掲げています。



一水ハ直ニ流レ候ヘハ川底掘堀レ申兩側ヲ痛メ
申者二而は無御座候、今吉野川ヲ岩津より東
海辺迄直ニ被遊候ヘハ、出水毎ニ川底
掘レ申候而、砂ヲ兩側ヘ馳上申候而
自然と堤之形チ出来可仕候、又不掘ラシ而
川中自然ニ掘レ申深ク相成可申候、其時川之
兩側ニ竹木芦之類ヲ植付置砂ヲ為抱候ヘハ
無造作ニ藪堤之形出来可仕哉と奉存候

【図 15】吉野川直流化の効果の概要（写真）と解説文

また「芳野川御普請愚考書」の中頃には、次の様な興味深い内容が確認できます。

一第十御関通より下之儀ハ御絵図師
鴨島村藤右衛門所持仕候下絵図を以相
認メ申候、彼地ハ南北之山遠候而難見渡ニ付
人家積之儀ハ仕不申候間御上之御国
絵図ニ而可然様御勘考可被仰付候
佐野塚・徳命・貞方村ニ而ハ如何相成候哉
若又古流之窪処杯ヘ相当申候時ハ
人家取除御座有間敷哉と奉存候
川幅之儀ハ岩津口ニ而五丁、海辺ニ而ハ
七丁位と相積置候ヘ共、猶相考申候而
別紙ニ川幅水積之図ニ委細書加ヘ置御座
候間御勘考可被仰付候
一 枝川条各別高低之地形之処ハ為引
平候而一圓二柳ヲ為植付候而、出水之砌
ゴミ砂留リ候様被遊候而可然奉存候
且亦枝川口ニ而ハ土俵ヲ相加ヘ候而砂ヲ高ク
為置上可申調儀肝要と奉存候
一 砂留之儀ハ柳のミニテハゴミ砂留リ申
事遅ク御座候ヘハ、兼而より百姓共ヘ
申付俵ヲ用意為致置候而、柳植付之
砌ハ右俵持參為致土俵ヲ作り流水ヲ
如横切正一文字ニ俵一ツ宛堅接ニ仕リ

「第十堰より下流については・・・(中略)、佐野塚・徳命・貞方村においては、旧川の窪地に川筋を通すことができれば、民家を取り壊すことも無くすることができると考えます。(一線部)」としています。先述の「芳野川堀替之絵図」において、第十堰下流のほとんどが陸地を貫流するようになっていましたが、佐野塚・徳命・貞方において旧川があったことを見越していたことが窺えます。また(一線部)川幅についても岩津口にて2丁、海辺にて7丁位と、この部分も「芳野川堀替之絵図」と一致していることが確認できます。

「芳野川堀替之絵図」において、絵図と一緒に「堀替仕方書」も存在していたと述べられていましたが、「芳野川御普請愚考書」がこれに当たる可能性が考えられます。

また続いて(一線部)「枝川筋や格別に高低差のある地形の場所は引き均して一円に柳を植え付けられれば、出水の際に土砂を留められる」とあります。芳野川御普請愚考書の前年の天保11年に作成された「吉野川絵図」(図16)の川岸の至る所に桃色に着色が見られます。

この絵図の凡例に「丑春 柳植附 桃色」とあり、ここに柳を植え付けたか、あるいは計画したことが窺えます。この吉野川絵図も実は、吉野川直流化に関係して作成されたのかもしれませんが。



【図 16】吉野川絵図（徳島県立図書館蔵）筆者加筆

芳野川御普請愚考書の後半部分には、吉野川直流化による治水の効果、支川との関係、川筋が一本化することによりできる新地（余地）のことなど、直流化することによるメリットなどについていろいろ触れています。特に新地については「大綱式千式三百町程之新地出来可仕哉と奉存候」と、2千2、3百町（2200畝～2300畝）ほどの広大な新地（耕作地）ができると見積っています。これが実現できれば流域住民も藩も相当な利益となったことでしょう。

さらに「吉野川之大水ヲ御治メ被為遊被下候ハハ聖人禹王ニも均キ御仁政ニ而…」と、吉野川の大水を治めることができれば「聖人禹王」の政治に等しい功績であると表現しており、古代中国で黄河の治水事業により洪水を防ぎ農業を発展させた伝説の帝王（聖人禹王）になれ、と云わんばかりの表現で当時の藩を仰いでいます。

おわりに

芳野川堀替見取図、芳野川御普請愚考書に見た吉野川直流化は実現には至りませんでした。後の治水論者 庄野太郎は、吉野川直流化構想から約25年後の慶応2年（1866）「芳川水利論」に次のような内容を残しています。

曩に麻植郡鴨島村に松村元助と称する人あり。君子の風あり。幼時の時より学を好み、氣力絶倫、博聞強識にして遂に郷先生の巨臂たり。ことに国学に精しく著述もまた富めり、天保中感慨歎息するところありて吉野川の水利を説く。

それより春夏秋冬、間を偷み河上に立ち、上下に逍遙し或時は山に登り、上流岩津より下流別宮までの水流を眺望し、その曲直の形勢を觀察し、同川を直流せしむる時は両傍荒蕪の地尽く膏瘦の地と成り、往事よりの水難を除き、官の裨益もまた許多なりと謂へり。

（中略）

筈も翁をして芳川水利の殊を掌らしめば、氣根と云ひ博学と云ひ事に關く所なく、多年を出でずして芳川直流に至るべし。惜哉官家許容無く終に空談となり九十四歳にして甲子冬家に没す。

【訳文】

以前、麻植郡鴨島村に松村元助という人がいた。君子の風貌があった。幼時より学を好み、氣力絶倫、博識で記憶力に優れ、遂に地元の知識人の頭となった。ことに国学に精通して著書も多くあった。天保年中に感慨嘆息するところあり、吉野川の水利を説いた。これより春夏秋冬、暇を見ては川ぶちに立ち、川の上流や下流を歩き回り、あるときは山に登り上流の岩津より下流の別宮口までの水流を眺望し、川の曲直の地勢を観察し、川の流れを直流させると、兩岸の荒地はことごとく肥沃の地となり、昔からの水害を除き、国家の利益もまた多大なりといえる。

(中略)

もし松村翁を吉野川水利の役に当たらせれば、氣骨からしても、博学ということからしても不足はなく、それほど長い年月かからず吉野川を直流させるようになったらう。しかし惜しいことに国の許可なく、その計画も遂に空論に終わり、翁は九十四歳で元治元年(1864)の冬に家で亡くなった。

「芳野川御普請愚考書」は、板野郡住吉村与頭庄屋を勤めた山田家に残されていたものです。芳野川御普請愚考書に作者名はありませんが、庄野太郎の言葉を見れば、吉野川直行論は松村元助が提案したものと考えられます。(松村元助については、史料が乏しくどのような人物か不明)これを山田家の当主であった山田五郎左衛門の手によって書き写し残されたものかもしれません。さらに「芳野川堀替之絵図」にある“麻植郡鴨島住稲穂千垂”は、庄野太郎が紹介した“松村元助”である可能性が極めて高いと考えられます。別々ですが、これらの史料が残されていたことで、当時の大変貴重な吉野川直流化の大構想を顧みることができました。



【図 17】 松村元助らが見通した吉野川直流化の方向（岩津より下流方向）